■偶然の重み

生後６カ月の時私は、父の仕事の関係で東京の吉祥寺から、北海道伊達紋別に移り、３歳までを過ごした。その後は、再度父の仕事の関係で東京へ戻り、小学校から大学まで自由学園で学んだ。

小学校２年の時、トミー工業（現タカラトミー）の開発部で常務取締役をしていた父、星川栄蔵が勤務中、交通事故で他界。38歳だった。その時トミーの創業者、富山栄一郎社長が、星川栄蔵の死を悲しみ、自社発売玩具に交通傷害保険を付け交通遺児を支援する保険の仕組みを作ったこと、社会人になってから知った。

卒業時、私は障害児の玩具開発を希望、トミー工業の試験を受け入社、入社２年後に結婚。仲人さんは、中学２年の担任であった赤木英哉夫妻にお願いした。

■大賀典雄社長

入社後半年、障害児の玩具を研究・開発する部署が新設され、配属。いくつかの玩具を開発していく内に、共用品へと発展、機構の前身団体であるＥ＆Ｃプロジェクトを立ちあげたのが1991年。その３年後、日本経済新聞社の高嶋健夫さんの提案で、「バリアフリーの商品開発」という書籍が同プロジェクト編で発行された。その本に当時ソニーの社長をされていた大賀典雄さんの共用品に関するお考えを伝えていただくため、ソニー本社にてインタビューを行った。はじめの硬い空気は、何かの流れで自由学園の話となり、大賀社長が前述の私の仲人、赤木英哉先生の従兄弟さんであることが分かり、硬い空気が一瞬で和らいだ。その後、ソニーが多くの共用品を創出してくれる一つのきっかけにもなった。

■日本規格協会　島さん・永井さん

Ｅ＆Ｃプロジェクトは、事業の広がりにより、公益財団法人共用品推進機構へと発展、共用品に関する日本工業規格（JIS）を作成する機関としても位置付けられるようになった。そのため、日本規格協会の方々と仕事を共にする機会が増えはじめた６年前のある日、協会の事務所で、永井克尚課長から「星川さんは小さい頃、伊達紋別にいなかったですか？」と聞かれた。父親同士が同じ会社で、同じ社宅、半世紀ぶりの再会だった。

更には、日本、中国、韓国とで当該分野の国際規格を提案するプロジェクトで韓国の済州島に行った帰りのバスの中、当時日本規格協会の理事長をされていた島弘志さんと話しているうち、島さんが、私の小学校１年の時の担任の原田時子先生のおいごさんであることが分かった。

■骨董品店で

今年の１月、住み慣れた町から骨董品店が多く並ぶ町に引っ越した。一軒一軒の店では、嗜好の違うモノ達が並び一日巡っても飽きることがない街。そんな店の一軒で、棚の上にあるトミー社の古いおもちゃを見つけた。ご主人に棚からとってもらったところ、古いそのパッケージに「トミー交通保険付きおもちゃ」とあった。

いろいろな形で人は、いつでも、どこかで、誰かに支えられている。感謝しつくせない。

おもちゃ一代

——富山栄市郎 伝

おもちゃ一代——富山栄市郎 伝
昭和五十五年九月一日発行
編集・発行　トミー工業株式会社・株式会社トミー　常務会
〒一二四　東京都葛飾区立石七—九—一〇　電話　〇三(六九三)一〇三一(大代表)
印刷　株式会社恒陽社印刷所活版事業部
製本　細沼印刷製本株式会社

は、年一回、東京・晴海で開催される日本玩具国際見本市をより盛大に発展させるため、努力を傾けることになった。

ところで、これら共催による見本市活動とは別に、トミーは国内における販売促進活動を熱心に展開してきた。昭和三十九年二月、トミーは東京・八重洲の大和証券ホールで、第一回「販売研究会」を開いている。対象は都内および周辺の小売店で、この種の研究会を一社で開催したのは、業界でははじめてのことである。同じ二月中に、東大阪市長堂に、大阪出張所を開設した。

いわゆる対業者販売促進活動は、たいへん強力に作用した。「販売とはコミュニケーション」だったのである。

〔1〕

富山栄市郎の終生かわらぬ経営哲学の第一項は、開発重視の原則であった。そしてそれは、現在そのまま允就の第一原則でもある。現在、トミーの開発部門には百五十余名の若いデザイナー、エンジニア、企画マンたちが、青木大を中心にして伸び伸びとクリエイティブな仕事を楽しんでいる。アメリカのロスアンゼルスにも、トミー・デザインの名前で開発部門ができ、アメリカ人、日本人の混成チームで、アメリカの風土での商品開発を行なって成果をあげつつある。「開発なければおもちゃ屋なし」これが栄市郎の「独立」以来の基本的な信念なのである。

トミーが富山栄市郎のこの哲学に基づいて当時開発したのが、「プラレール・シリーズ」であり、話す人形「お話しミコちゃん」であり、「メカニック・シリーズ」「マジック・スカイレール」等々である。

この中の話す人形「お話しミコちゃん」の開発を担当したのは星川栄蔵だった。

熱帯性低気圧が接近しているという。その影響なのかもしれなかった。雨が降った。昼がたになって雨はいったんあがったが雲は動かずそのために蒸し暑い午后になった。昭和四十年八月十六日のことである。営業部所属の若い社員が、葛飾区立石のトミー工業本社玄関のところで、星川栄蔵と会った。彼は中古の自転車のハンドルを押して、どこかへ出かけようとしているところだった。

「星川常務、どちらへお出かけですか」

と青年は挨拶がわりに声をかけた。

「ああ、ちょっと四ツ木の第三工場まで」

「じゃ、車でお送りしましょうか」

と、若い社員はいった。彼は浅草駒形のトミーへ車で帰るところだった。

「ありがとう。でも気晴らしに自転車もいいもんだよ。雨もあがったことだしね」

星川は辞退した。そうですか、と青年が車を駐めてあるほうへ歩み去ろうとすると、星川が、

「きょうは息子の誕生日でね」と自分から話しはじめた。「あいつ、いまごろ小学校の友だちと誕生パーティをやっていると思うよ」

「じゃあ、星川常務もきょうはお早くお帰りにならないと」

「いや、それならば昨夜、誕生日前夜祭をやって済ましといたんだよ。なんだか、きょうは帰ってやれそうもないような気がしたもんでね」

星川が微笑した。それは心にしみるような微笑だったと、のちにその青年が語っている。彼は星川がゆっくり

とペダルを踏んで正門を出て行くのを立ち止まって見送った。

事故はその数分後に起きた。交差点で信号が変わるのを待っていた星川に向かって、雨あがりでスリップした小型トラックが突進してきた。彼は自転車もろともはね飛ばされ、頭部をガードレールで強打した。救急車で病院に運ばれたが、意識がなかった。

この日、富山栄市郎は東京にいない。札幌のホテルで商談中に専務允就の電話で知らされ、急きょ千歳から羽田へ帰ってきた。

十七日になったが意識は回復しなかった。十八日も十九日も容態は危篤を続けた。二十日に至って星川は担当医の呼びかけに微かな反応を示すようになった。

「生命はとりとめたようです」

と担当医がいった。だが、その日の午后十時四十五分に星川栄蔵は息を引き取った。三十八歳の若さだった。

彼は玩具の開発に大きな理想を抱いていた人物で、トミー工業ではまだ二年八カ月にしかならなかったが、彼の開発した玩具はわが国の業界に新鮮な風を送ってきた。創作意欲がさかんで、アイデアも尽きることがない。バロック音楽を好み、バッハやビバルディを聴いていると、次に作る玩具の発想が浮かんでくるのだ、としばしば人に語った。

星川栄蔵の臨終にいあわせたひとびとは、遺体におおいかぶさって号泣する富山栄市郎のさまを見た。体裁をかなぐり捨てて身もだえしながら泣きわめいている男の姿は、厳粛でさえあった。

葬儀は、社葬として手厚く行なわれた。式場にあてられた栄市郎の自宅では、ビバルディの「四季」が厳かに流された。

トミーが自社発売の玩具に交通傷害保険をつけると発表したのは、星川栄蔵が交通事故で死亡してから四カ月後、昭和四十年十二月だった。玩具販売によって得た利益金の一部を傷害保険の形で不慮の事故にあった子どもたちに還元しようというものだが、本来の目的は「全国の子どもたちを交通戦争から守ろう」というところにあり、この企画には星川栄蔵の死を悼む富山栄市郎の愛惜がこめられていた。

話す人形「お話しミコちゃん」が誕生した昭和三十九年は東京オリンピックが開催された年である。オリンピックをひかえてテレビの普及率は九十パーセントを越え、「消費は美徳」といわれる大量消費時代、テレビ媒体による宣伝は、直接消費者に訴求する手段として最も有効だった。

昭和四十年の前半は企業にとって暗い幕開けとなった。オリンピック好況の反動が不況となってあらわれ、景気は沈滞した。四十一年中に倒産した企業は、史上最高といわれた。

トミーが本格的なテレビ番組提供による宣伝を開始することになったのは、昭和四十年六月からだった。テレビで放映された良い製品は確実に消費者に受け入れられ、見本市活動などによる対業者販売促進活動とあいまって売り上げを伸ばしたのである。これは昭和四十四年のことになるが、トミーが発表した「ロボット大回転」ほど、テレビCMの特性にフィットして評判になった玩具は、他社に例がなかった。

これは歩行するロボットが壁に突き当たってうしろへ倒れるが、しかしまた、自分で起き上がって歩き始めるという電動玩具である。「人生七転び八起き」を玩具にしたような製品で、この開発までに研究部は七転八倒して苦しんだが、ロボットは七転八起するのだった。

トミーのコマーシャルは「倒れても倒れてもなお起き上がる男のド根性」とふざけてやんやの喝采をはくし、

トミー交通保険つき
おもちゃ
TOMY
株式会社トミー
たのしい

株式会社トミー
トミー
オルゴールどうが
たのしいメロデーに
あわせてがめんがうごく
1才－5才用